

国際共同研究の「出会い」から「継続」へ：

多様な起点から広がる実践的連携形成

From Encounters to Continuity in International Collaborative Research:
Practical Case Studies of Partnership Formation from Diverse Starting Points

合田美子*

Yoshiko Goda *

*熊本大学

*Kumamoto University

＜あらまし＞ 国際共同研究の始まりは、学友ネットワーク、国際学会、書籍プロジェクト、研究滞在など様々なきっかけから生まれる。しかし、継続的な共同研究へと発展させるには「出会い」「信頼関係の構築」「継続の工夫」「発展への展開」という4つの段階があるように感じている。国際共同研究は、国内の日本人研究者同士の共同研究と基本的な構造は共通しているが、制度・文化の違いやコミュニケーション、資金制度の活用など、いくつかの配慮や工夫が必要となる。本稿では、筆者の実践事例をもとに、国際共同研究の継続と発展に向けたプロセスと留意点を整理する。

＜キーワード＞ 国際共同研究、連携形成、継続的発展、信頼関係構築

1. はじめに

国際共同研究への関心は高まっており、多様な研究者との連携が新たな知見の創出につながっている。筆者もこれまで複数の国際共同研究に取り組んできたが、そのプロセスを振り返ると「出会い」「信頼関係の構築」「継続の工夫」「発展への展開」といった段階が確認できる。本稿では、筆者の実践を事例として、国際共同研究をどのように継続・発展させてきたかを整理する。

2. 国際共同研究の出発点の多様性

国際共同研究の出発点は多様であり、以下のような経路が存在した。

2.1. 学友ネットワークからの展開

台湾・成功大学との連携は、学生時代からの学友関係が基盤となった。2024 年度はSDGs の課題と解決策をテーマとした授業に参加し、講義を担当するとともに、学生の発表へのコメント、フィードバックも行っている。教育活動と研究活動の双方で交流を継続している。

2.2. 国際学会・ワークショップでの交流

AECT (<https://www.aect.org/home>) の International Research Symposium (IRT)や、EDUSummIT など、単なる学会発表ではなく、比較的少人数で、あるテーマについて深く議論する機会へ参加することで、同じ興味があり、さらに一緒に研究を続けたい研究者

と出会ってきた。こうした組織的枠組みには、自然と共同研究が誘発される仕組みが存在する。例えば、EDUSummIT2023 (<https://www.let.media.kyoto-u.ac.jp/edusummit2022/about/>) で同じグループであった研究者と、ワークショップのテーマであった自己調整学習(SRL)について、さらに調査を進め、SRL に関する Umbrella Review を行い、成果を国際誌に発表した(Prasse et al., 2024)。

2.3. 書籍プロジェクトでの間接的接点

米国・Purdue 大学の Jennifer Richardson 教授との連携は、Community of Inquiry (CoI) に関する書籍プロジェクトがきっかけであった。Call for Chapter に応募し、それぞれ別章を執筆したことが交流のきっかけとなった(Goda, 2024)。その後、招聘や相互訪問、小規模な研究会、研究資金の獲得と発展を続け、博士課程学生やポスドクも巻き込んだ国際的な研究ネットワークに成長している。

2.4. 研究滞在中の議論からの発展

米国・Michigan 大学では、客員研究員として1年間滞在した経験がある。滞在期間中に現地の教員や研究者と日常的に議論を重ねる中で新たな研究課題が設定され、共同研究がスタートした。長期滞在は、相互理解を深め、より緊密な研究基盤形成につながっている。

3. 継続と発展に向けた工夫

国際共同研究の継続や発展における基本的な進め方は、国内の日本人研究者との共同研究と大きくは変わらないように感じている。ただし、国際的な場面では、言語・文化の違い、役割の認識、キャリア形成、資金獲得などの観点で、いくつかの意識的な配慮と準備が重要になる。以下に、筆者が意識している継続・発展のための4つの観点を示す。

第1に、自身の専門性を高め、それを国際的に発信していくことが出発点となる。国際共同研究では、海外の研究者に「自分はどういう専門性を持ち、どのような研究を進めているのか」を知ってもらうことが重要である。そのためには、国際学会発表や論文発表などを通じて、自身の研究内容や得意分野を可視化し、共有していく努力が不可欠である。

第2に、共同研究のパートナーとして対等に参加する姿勢が求められる。プロジェクトにおける役割分担を考えたとき、自らがどの部分で価値を提供できるかを明確にする必要がある。教育学の研究者として基礎的な理論や方法論の知識・スキルを身につけておくことは前提であり、その上で、自身の得意分野や強みを他の多様な分野の研究者と共有できることが重要となる。

第3に、尊重し合い、支え合う関係性を築くための良好なコミュニケーションが必要である。言語や文化の違いがあるからこそ、相手の立場や背景を理解しながら丁寧に対話を重ねることが信頼関係の構築につながる。研究の進行状況だけでなく、研究外での交流や日常的な会話も信頼の土台となる。

第4に、継続的なプロジェクト運営のための資金獲得活動を、相互に協力して進めることが重要である。オンラインを活用した議論も進めやすくなったが、やはり対面での訪問や相互交流は信頼関係を深める上で有効である。そのため、相互の訪問や研究活動を支えるための助成金獲得や制度の活用も積極的に進めている。

4. 国際共同研究における課題と対応

国際共同研究では、国内の共同研究と共通する面が多い一方で、制度や文化、研究環境の違いが課題となる。倫理審査や契約、予算執行の制度は国ごとに異なり、調整に時間を要することがある。また、研究の進め方やスケジュール感の違いに柔軟に対応し、持続的にコミュニケーションを取る姿勢が重要である。

さらに、言語や文化的背景の違いも意思決定に影響する。英語での会話だけでなく、相手の立場や背景を理解しながら議論を進める力が求められる。特に、研究の進捗共有や執筆、役割分担の場面では、丁寧な対話が信頼関係の基盤となる。

物理的な距離や時差も大きな要素であり、オンラインの活用で距離の制約は減少したものの、対面交流の重要性は残る。事前のスケジュール調整や無理のない運営体制の工夫が有効である。

5. おわりに：小さく始め、信頼を積み重ねる

国際共同研究は、必ずしも最初から大規模なプロジェクトとして始まるものではない。むしろ、学会発表、短期滞在、シンポジウム登壇、セミナー参加といった比較的小さな機会が出発点となることが多い。それらの出会いを大切にし、一つひとつの経験を積み重ねていく中で、信頼関係が形成され、次第に研究ネットワークが広がり、共同研究が安定して継続・発展していく。

国際共同研究は、研究そのものだけでなく、教育活動、人材育成、国際交流といった様々な側面を内包して広がっていく可能性を持っている。今後も、自身の専門性を高めながら柔軟で持続可能な国際連携を模索していきたい。

参考文献

- Goda, Y. (2024) Design and facilitation to balance Social, Teaching, and Cognitive Presence. In Cleveland-Innes, M. F., Stenbom, S., & Garrison, D. R. (Eds.) *The Design of Digital Learning Environments: Online and Blended Applications of the Community of Inquiry*, Routledge, London, pp.84-104.
- Prasse, D., Webb, M., Deschênes, M., Parent, S., Aeschlimann, F., Goda, Y., Yamada, M., & Raynault, A. (2024) Challenges in promoting self-regulated learning in technology supported learning environments: An umbrella review of systematic reviews and meta-analyses. *Technology, Knowledge and Learning*, 29, 1809–1830.